

# 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績，業績

—第3報 著書について—

廣谷 速人

京都市

受付：平成20年9月3日／受理：平成20年12月5日

**要旨：**京都医科大学初代整形外科学教授松岡道治は，その在任中，第2報<sup>1)</sup>で報告した雑誌掲載論文以外に，日本人医師によって初めて書かれた整形外科学教科書やドイツ語で書かれた先天性股関節脱臼についてのエックス線像のモノグラフを含む単独著書4冊を上梓するとともに，3冊の共著書籍に各1論文を寄稿し，さらに一般向けの啓蒙講演5編を2冊の講演集に発表していることを，今回明らかにすることができた。

**キーワード：**松岡道治，人体畸形矯正学，先天性股関節脱臼，骨関節結核，エックス線像

## 第1章. はじめに

京都医科大学整形外科学講座初代教授の松岡道治の事績，業績に関して，著者はすでに講座設立に際しての経緯<sup>2)</sup>ならびに松岡の学術論文<sup>1)</sup>について詳述した。これらに引き続き，今回は松岡の著書について調査し，考察を加えたので，その背景とともに報告する。

## 第2章. 著書

松岡道治の著書は、『京都帝国大学史』の記述<sup>3)</sup>や死去時の追悼文<sup>4)</sup>に基づいて、『先天性股関節脱臼及び其跛行療法』<sup>5)</sup>『人體畸形矯正学』<sup>6)</sup>『Atlas der angeborenen Verrenkung des Hüftgelenks in Röntgenbildern』<sup>7)</sup>の3冊であると従来考えられてきた。しかし他にも多くの学術書や一般向けの講演記録などが存在することを，筆者は今回明らかにすることができた。

これらについて，以下単独著書，共同執筆書への寄稿などに分けて，発行年次順に記述する。

### 第1節. 単独著書

#### 第1項. 先天性股関節脱臼及び其跛行療法<sup>5)</sup>

本書は本文65頁，写真17葉の書物で，先天性股関節脱臼の病理，症状，治療法が詳述されている。

付図として，大腿骨頭病理標本の写真1葉，患者の全身写真，股関節脱臼整復手技(図1)，ギプス固定後の患者写真などが13葉，股関節のエックス線写真3葉が掲載されている。被写体となっている患者の多くは学童期と見られ，当時のわが国の先天性股関節脱臼患者の実態をうかがうことができる。本書のなかで松岡は，「余ハ路上屢々先天性股関節脱臼患者ガ高度ノ畸形ニ陥リタルヲ見ル 是レ患者自ノ不幸ノミナラズ我医学界ニ於ル治療科不進歩ノ致ス所ナリトス 其他父母ノ愚昧モ与ツテ影響スルモノトス」と嘆いている<sup>8)</sup>。

一方初生児，未歩行児の診断<sup>9)</sup>については，「患者ノ父母ハ屢々確診ヲ乞ウテ止マザルモノアリ」とし，大腿内側の「皺襞ノ不平均ヲ以テ唯一ノ診断法トス」と書いている。このような基盤があったこそ，先天性股関節脱臼に関するドイツ語モノ



図1 Lorenz 第二法による徒手整復操作  
文献5. 第六図.

グラフ<sup>7)</sup>に乳児症例のエックス線写真を掲載することができたのであろう(後述)。

本書には先天性股関節脱臼の治療としていくつかの非観血的整復法が紹介されているが、松岡自身はLorenz<sup>10)</sup>の第二法<sup>11)</sup>を好んだようである(図1)。しかし「著者ハ自己ノ教室ニ来ル股関節脱臼患者ニ治療ノ危険ナクシテ畸形ノ治癒スベキコトヲ説クコト屢バナレドモ父母ノ無智ナル一時ノ偽愛ニ誘ハレ危険ナキ無出血性ノ療法ヲ受ケズシテ故郷ニ帰ルモノ多シ 茲ニ深ク世ノ父母ニ訴フ<sup>8)</sup>」と述べ、自らドイツ留学で学んできた当時の先進医療技術がわが国で受け入れられないことに、もどかしさを覚えている。

## 第2項. 骨及ビ関節ノ結核<sup>12)</sup>

本書は本文115頁の書物で、『中外医事新報』に連載した論文「骨及ビ関節ノ結核」(明治39年8月から同40年2月まで)<sup>13)</sup>をまとめたものである。

本書では、先人の諸業績を豊富に引用しつつ骨・関節結核の病因、症状、診断、治療(全身の治療、保存的治療、観血的局所治療法)が整然と記述されているほか、自身の東京大学第一院での

経験<sup>14)</sup>や留学中のヴェルツブルグ医科大学病理学教室での実験<sup>15)</sup>、さらにはブレスロウ大学での見聞<sup>16)</sup>が紹介されている。

本書の記述でとくに注目すべきは、骨関節結核の治療法としての安静の意義についての説明である。すなわち、「余ノ所謂患肢ノ安静トハカカル意義(「患者ヲ就褥セシムル」こと。筆者注)ニアラズ、則チ罹患関節ハ其レニ対スル一定ノ位置ニ固定シテ該部ノ運動ヲ禁止シ、之ト同時ニ患者ハ室ノ内外ニ於テ自由ノ身体運動ヲ与フルニアリ」として<sup>17)</sup>、骨関節結核治療に対するこの原則は、今日とまったく変わらない卓見である。

なお患部の固定材料として義布斯<sup>ギブス</sup>以外に、独仏英米至るところで使用されている水硝子(珪酸ナトリウム)やチエルロイド(Zelluloid.セルロイド)などを試みたが、京都という土地柄のためか良くなかったと述べて<sup>18)</sup>、整形外科科学開拓者としての苦勞を伝えている。

さらに治療として「骨ノ欠損ニ向ヒテハ石灰ヲ奪取セル骨片或ヒハ消毒シタル義布斯泥又ハ磷酸及ビ沃度<sup>ヨードフォルム</sup>仿謨ヲ混合セルセメントヲ以テ欠損部ヲ補充スルヲ佳トス」という記述<sup>19)</sup>は、明治末期の

結核病巣治療の常識からすれば、画期的な発想であったと言える。

なお本書には「骨結核ノ好発部位比較表」（脊椎骨がもっとも頻度が高く、尾骶骨〔尾骨〕が最低）と「関節結核ノ好発部位比較表」（膝関節が最高、肩尖鎖骨関節〔肩鎖関節〕が最低）が付いているが、実際の統計的観察による数値に基づくものではないように見える。

### 第3項. 人體畸形矯正学<sup>6)</sup>

本書は日本人によって書かれた本邦初の系統的な整形外科教科書である。

本書の冒頭に収められている「人體畸形矯正学ノ一小史」の章は、留学帰朝直後に書かれた論文「「オルトペデー」ノ一小史」<sup>20)</sup>の末尾に、「著者ハ千九百〇六年六月京都医科大学ニ於テ此科ヲ担当シ千九百〇九年ニ於テ已ニ六千ニ近キ畸形患者ヲ治療セリ」という1段落の文章を追加して構成されたものである。これに続く各章は、『中外医事新誌』誌へ明治40年1月から同42年2月まで29回にわたって連載された論文「「オルトペデー」トハ何ゾヤ」<sup>21)</sup>を骨子としたものである。

### 第4項. Atlas der angeboren Verrenkung des Hüftgelenks in Röntgenbildern<sup>7)</sup>

本書は、従来想像されていたような独立した単行本ではなく、雑誌『Fortschritte auf dem Gebiete der Röntgenstrahlen』のErgänzungsband（別巻，補遺）である『Archiv und Atlas der normalen und pathologischen Anatomie der typischen Röntgenstrahlen』（以下『Archiv und Atlas』と略す）シリーズの第24冊として発行されたモノグラフである。

大判，ハードカバーの書籍で，巻頭のAlbers-Schönberg教授<sup>22)</sup>への謝辞，序文，写真目次に続いて，10頁に亘って股関節エックス線写真60葉が奇数頁に，その説明文が偶数頁にそれぞれ印刷されている<sup>23)</sup>。

本書は当時のドイツ専門学会の注目を引いたと言われている<sup>3)</sup>，事実レントゲンや整形外科の専門雑誌の書評欄<sup>24,25)</sup>に取り上げられている。また，同じ『Archiv und Atlas』シリーズの第3集と

して1900年に公刊されたボン大学Schede教授<sup>26)</sup>の著書<sup>27)</sup>に提示された症例の年齢が1歳半から13歳までであって乳児症例は皆無であったことと比べれば，本書に乳児例（生後4カ月児2例，生後7カ月児1例）が含まれている（図2）ことは，当時としては特記すべきことである。

以下本書に関するいくつかの側面を考察する。

#### (1) 本書の所在について

筆者は平成元（1989）年にニューヨークの古書店から本書を入手した<sup>28)</sup>。従来国内には現存しないと考えられていた<sup>29)</sup>が，筆者の調査によれば，京都大学医学図書館，香川大学附属図書館医学部分館<sup>30)</sup>，新潟大学附属図書館医歯学図書館（旭町分館）（日本医史学会前理事長蒲原宏博士とともに筆者が確認〔平成16年4月5日〕）に所蔵されているだけでなく，九州大学附属図書館医学分館（私信，日本医史学会会員小林晶博士，平成15年11月14日），日本医科大学中央図書館（私信，殿崎正明同図書館事務室長・日本医史学会員，平成16年3月25日）にも，それぞれ所蔵されていることが判明した。

なお京都大学整形外科学教室は，筆者の提案によって筆者の所蔵本から複製し，平成18年4月の教室創立百周年祝賀会参加者へ配布した<sup>31)</sup>。

#### (2) 本書掲載のエックス線写真について

本書掲載のエックス線写真は，松岡がドイツ・ハンブルグのAlbers-Schönberg教授の下へ留学し，そこで得られた研究成果（エックス線写真の原板）を持ち帰ったものではないかと言う憶測も過去には見られたが，それは本書を手にしたことのないものの根拠なき想像であるだけでなく，松岡の名誉を傷つける発言と言わざるを得ない。

その最大の理由は，本書の序文に，撮影，現像，焼付けを京大整形外科学教室X光線室において自ら行なったことが，明白に記述されていることである。このことは，第二報<sup>1)</sup>で述べたように，松岡がエックス線に関する卓越した知識と技術を（東京）帝国大学医科大学卒業直後から持っていただけでなく，留学によってさらに向上させてい



図2 乳児股関節脱臼症例のエックス線写真

左上は4カ月女児の股関節エックス線写真，右上は左上と同一患者と思われる女児の腰椎，骨盤エックス線写真．左下は2歳女児の骨盤エックス線写真，右下は左下と同一患者と思われる女児の右股関節脱臼整復後4カ月のエックス線写真．文献7. Tafel Iの部分．

た<sup>32)</sup> ことから当然と考えられる。

第2の理由として，京都医科大学で乳児の先天性股関節脱臼診断にも豊富な経験を持っていたことを挙げるができる<sup>6)</sup>。

### (3) 公刊の経緯

本モノグラフの公刊に至った経緯を以下考察する。

#### (i) Albers-Schönberg 教授と松岡との関係

Albers-Schönberg 教授の教室の後継者である Allgemeines Krankenhaus St. Georg, Hamburg [以下 AKSGH と略す] 放射線診断学科主任 Herman Vogel 教授 (私信. 平成16年7月20日) によると、『Archiv und Atlas』シリーズの執筆者とテーマは，Albers-Schönberg 教授自身が直接選定していたと言われている。

したがって両者の関係を検討すると，まず本書の冒頭に，“ein Arzt aus Japan”として Albers-Schönberg 教授への松岡の献辞があるが，このような献辞は著者としてはむしろ当然であって，両

者の特別な関係，とくに師弟関係を示唆するものではないと思われる。

次に Albers-Schönberg 教授が松岡の名前を知ったのは『Fortschritte auf dem Gebiete der Röntgenstrahlen』誌への投稿論文，あるいは同誌掲載の学会記録からではないかと考えられる。しかし，同誌の第1～第50巻(1897/98 [明治30/31]年)～1934 [昭和9]年)の掲載論文の著者索引<sup>33)</sup>にも，同誌の1巻(1897/98 [明治30/31]年)から17巻(1911 [明治44年])に掲載されたエックス線学関係の学会記録に“M. Matuoka”の名前を見出し得ない。

第3に，上記 Vogel 教授 (私信. 同上) は，教室の来訪者名簿などが2度の世界大戦で焼失していることもあって，松岡が AKSGH に在籍あるいは留学していた，あるいは直接 Albers-Schönberg 教授を訪れたという記録は存在しないと筆者の質問に答えているので，同教授のもとへの留学，訪問の可能性もまた否定せざるを得ない。

第4に，渉猟し得た限りの松岡の論文，講演に，

本書謝辞<sup>7)</sup>以外に Albers-Schönberg 教授の名前が出てくるのは明治45年の一論文<sup>34)</sup>のみである。しかしその文中には「独逸ノエックス放射線ノ研究者シェンベルヒハ……」と Albers-Schönberg 教授の業績を単に「シェンベルヒ」と姓の一部だけ記して引用、紹介している。このことはきわめて異例、かつ不自然であって、両者に深い交流があったとは到底判断し得ない。

第5に、Vogel 教授（私信。同上）は両者は教室外で出遭ったのではないかと述べているが、たとえば1905（明治38）年4月開催のドイツ・レントゲン会議（Deutscher Röntgenkongreß）とその期間中に創立、開催されたドイツ・レントゲン学会（Deutsche Röntgen-Gesellschaft）の出席者名簿<sup>35)</sup>に“Michiharu Matsuoka”の名前はない。

しかしこれら会議、学会が開催された時期は松岡の帰国約1年前であり<sup>2)</sup>、なおかつ帰国後の講演<sup>32)</sup>で「独逸では毎年四月には学会が開けて、雙方（大きなランプを作る会社と小さいランプを作る会社。著者注）からランプを持って来て写して見て、互に競争をして居る、総て外国の競争は実物でやる」と述べているところから、これらの学会へ正式に登録することなく出席していたものと推測される。

また同講演<sup>32)</sup>で、「私は多年独逸に居つて使つて見たり、……」とも述べているところから、留学中いずれかの大学あるいは病院でエックス線診療、とくに先天性股関節脱臼の診療に関与し、そこで偶然 Albers-Schönberg 教授と逢い、その知遇を得た可能性も考えられるが、それを示唆する記録も存在しない。

なおドイツ・レントゲン博物館（Deutsches Röntgen-Museum）には松岡に関する記録は存在しない（私信。Monika Radan, Bibliothek des Deutschen Röntgen-Museums. 平成17年1月12日）。

以上から、偶発的なわずかな可能性を除いて、Albers-Schönberg 教授の下への松岡の留学は言うに及ばず、ドイツ留学中での両者の交流を直接示すいかなる記録も見出し得なかったと結論するほかはない。

## (ii) 松岡の自発的投稿

松岡は本書序文で「（エックス線写真像の優れた）再現作成に関して周到な配慮を賜った Albers-Schönberg 教授の犠牲的な好意によってこのような形（『Archiv und Atlas』シリーズの一卷と言う意味か）で成功し得たことを、筆者は衷心より感謝する」と述べている。

この文言は、わが国では不可能に近いほど鮮明に再現、印刷が当時可能であった『Archiv und Atlas』シリーズへ、先天性股関節脱臼の自験エックス線写真を投稿し、出版、公表する意図が松岡にあったことを示唆するものであると考えられる。そのように考えると、献辞の“ein Arzt aus Japan”という署名は、文字通り面識のない“日本からの一医師”としての松岡の投稿者としての姿勢を如実に示すものと読み取ることが出来る。

以上から、筆者は松岡が『Archiv und Atlas』へわが国の印刷事情などをとくに訴えて投稿し、その内容が編集者である Albers-Schönberg 教授に評価されて本書の出版が実現したものと判断せざるを得ない。

## 第2節. 共同執筆書への寄稿

### 第1項. 済生学舎講師講義 外科臨床講義録 卷中 外科篇<sup>36)</sup>

本書は文字通り済生学舎<sup>37)</sup>における講義の記録を部位別に編集したものである。個々の講義記録は症例報告の形をとっていて、血族（家族歴）、既往症、現症、原因、鑑別及診断、予後、療法が順次記載され、解説されている。

松岡の論文は本書「第十六 下肢之部」に収録されている以下の2編である。

1. 〔八〕 梅毒性股関節強直兼多発護膜腫ノ一例. 331~336頁
2. 〔一四〕 内翻馬足ノ一例. 357~365頁

なおすでに第二報<sup>1)</sup>に示したように、松岡の講義記録（症例報告）は、明治33-34年の『済生学舎医事新報』へ独立した論文として9編掲載されている<sup>38)</sup>。

## 第2項. 最新結核病論<sup>39)</sup>

本書は、編者である山谷徳治郎が主幹である明治44(1911)年創刊の『日新醫學』、大正2(1913)年創刊の『臨牀醫學』(出版元はともに日新醫學社)の両誌に掲載された結核関係の論文を集めて一書としたものである。

本書の511~530頁に松岡の「輓近ニ於ケル結核性股関節炎療法」が収録されている。発表時の論文<sup>40)</sup>と比べると、その内容は同一であるものの、松岡の肩書きが当然ながら「前京都帝国大学医科大学教授」となっているほかに、理由は不明であるが標題が一部変更されている。

この論文は、股関節結核に対する治療法、ことにその股関節拘縮の機械的矯正法について多数の付図とともに解説していることが特徴である。

## 第3項. 日本内科全書

本書は青山胤通撰、林春雄、富士川游、尼子四郎、宮本淑を編者として大正2(1913)年から昭和16(1941)年に亘って1巻から9巻まで吐鳳堂

から出版された内科学全般に関する全集であって、各巻はそれぞれ数冊および1~3冊の別録に分かれている。

松岡が執筆した「温熱療法」<sup>41)</sup>は、本全書の第2巻、第1冊に収録されていて、松岡は全身ならびに局所への温熱効果を述べたのち、全身、局所の温熱応用について、乾性包纏法(trockene Einpackung)から局所的透熱法(デアテルミー)までを多数の器械の図とともに具体的に解説している。

## 第3章. 一般市民に対する講演録

### 第1節. 叡山講演集<sup>42)</sup>(図3)

本書は、大阪朝日新聞社が主催し、明治40年8月夏期休暇を利用して比叡山の叡山文殊楼前の旧天台宗大学林跡で早朝開催された講演の速記録である。

本書に掲載されている松岡教授の講演は以下の通りである。

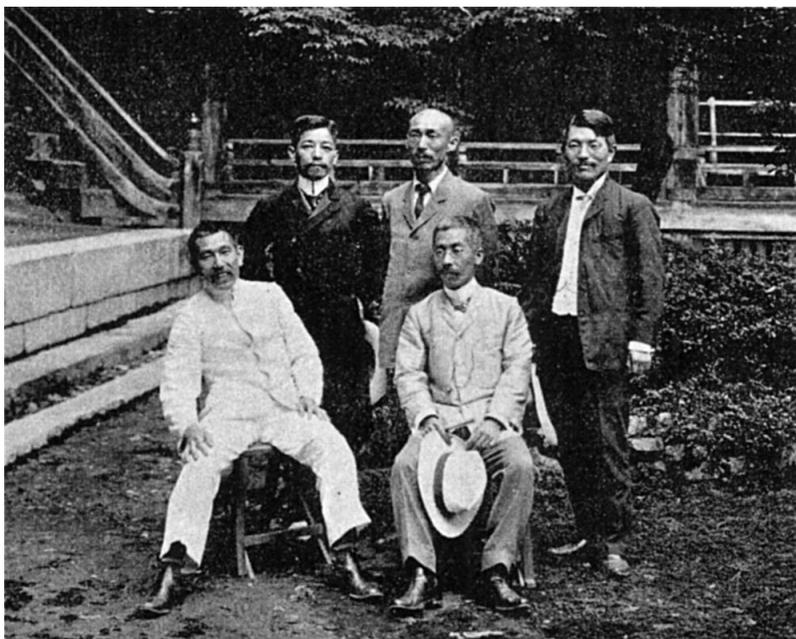


図3 叡山講演会講師写真

後列左端が松岡道治教授。その右は足立文太郎博士(京都帝国大学京都医科大学解剖学講座教授)、右端は青柳栄司工学博士(同理工科大学電気工学講座教授)。前列左は勝木勘三郎法学博士(同法科大学刑法・刑事訴訟法講座教授)、右は松本文三郎文学博士(同文科大学哲学・哲学史講座教授)。文献42。巻頭写真。

### (1) 人体を透視する方法<sup>32)①</sup>

松岡は本演題の下で、もっとも得意とするエックス線装置について、その原理を図で示しながら丁寧に説明するとともに、留学中に購入したエックス線発生管球や自ら撮影したエックス線写真を参加者に供覧している。

特記すべきは、「ラジウム」についても言及していることであって、伯林の大学でウサギの目に対する「ラジウム」の影響を確かめる実験を行ったと述べる（後述）とともに、高価な「ラジウム」を少量購入して持ち帰ったことを示唆する発言もある。

### (2) 如何なる病気が最も残酷なるや<sup>42)①</sup>

当時最も残酷な疾患と考えられていた癌<sup>43)</sup>と結核についての一般的な解説である。癌についてはその病因論に触れたのち血液やリンパによる転移について言及し、結核に対しては牛乳などによる栄養療法や気候療法によって身体の新陳代謝を盛んにすれば予防が可能であると述べている。

### (3) 生と死<sup>42)②</sup>

細胞の集合体である生物としての人間が備えている「内の条件」と地球という変遷する「外の条件」とについて解説し、「内なる条件」については医学の進歩によって多くのことが明らかになっているので、始終変化している「外の条件」と調和を図ることによって長寿を保つことができると論じ、松岡の死生観を縷々述べている。

### (4) 吾人は天然の賜物を如何に応用すべきや<sup>42)③</sup>

天然の賜物である気候、水、空気などを上手に利用するように「外の条件」を研究することがひとの健康に必要であるとし、とくに海水浴、鉱泉（冷泉、温泉）浴、日光浴などの効用について海外の例を引きながら縷々説明している。末尾に自ら調査したと言うわが国の「健康地分布図」<sup>44)</sup>が付けられている。この地図は当然会場で披露されたことと思われる。

すなわち、松岡はこれら連日の講演を通じて西欧の個人衛生思想の一般市民への普及に努めた。

## 第2節. 現代思潮 二十一家講話<sup>45)</sup>

本書は『大阪新報』<sup>46)</sup>誌上に連載された記事を、編者が後日著者を直接訪問して再確認し、収録したものである。

本書の112～130頁には松岡の「通俗看護学」という講演が収録されていて、今日で言う個人衛生、すなわち精神的な満足感の必要性とともに、睡眠、休息、清潔（口腔衛生、入浴）、食事（衛生的飲料水）、衣服など日常での留意点を平易に解説している。

## 第4章. むすび

本稿では、前稿<sup>2)</sup>に引き続き松岡の著書、すなわち単独著書、共同執筆著書への寄稿論文について論述した。とくに単独著書については、その底本となった学術論文を検索し、さらに従来存在は認められていたものの、その所在が不明であったドイツ語モノグラフに関して、その所在、内容だけでなく、その編集者であったAlbers-Schönberg教授と松岡との関係についてもとくに考察を加えた。

さらに一般人を対象とした5つの講演が2冊の講演集に収録されていることも明らかにすることもできた。

稿を終るにあたり、日本医史学会・蒲原宏前理事長、日本医科大学中央図書館・殿崎正明事務室長、福岡市・福岡整形外科病院小林晶顧問、山口県周南市・松本整形外科医院松本禎仁博士、ドイツ Allgemeines Krankenhaus St. Georg, Hamburg 放射線診断学科主任 Herman Vogel 教授のほか、Deutsches Röntgen-Museum (Ms Monika Radau) および京都大学付属図書館、同医学図書館、京都府立医科大学の各図書館職員各位のご教示とご援助を受けた。ここに付記して深甚の謝意を表す。

## 注記と引用文献

- 1) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績，業績 第二報 松岡道治の学術論文. 日本医史学雑誌 2006; 52(3): 361-393
- 2) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績，業績 第一報 京都大学整形外科学教室の創立. 日本医史学雑誌 2005; 51(3): 385-406

- 3) 京都帝国大学. 一六 整形外科学教室(第二編 学部及研究所 第二章 医学部 第三節 学術). 京都帝国大学史. 京都: 京都帝国大学; 1943. p. 349-354
- 4) 近藤鋭矢. 松岡道治先生の御長逝を悼みて. 整形外科 1953; 4: 176-177
- 5) 松岡道治(著作兼発行者). 先天性股関節脱臼及び其跛行療法. 東京: 丸善株式会社(発売所); 1910/1/31  
国会図書館の近代デジタルライブラリー<sup>①</sup>からアクセスできる本書には第16図, 第17図(ともに整復後のエックス線写真)が欠落している.  
① <http://kindai.ndl.go.jp/index.html>
- 6) 松岡道治(著作兼発行者). 人體畸形矯正学. 東京: 丸善株式会社(発売所); 1910/7/10  
本書は, 昭和59(1984)年4月, 大阪市立大学医学部島津見教授(現・同大学名誉教授)が第52回中部日本整形外科学会災害外科学会を主催したとき, それを記念して幼少時から畏敬していた松岡先生を顕彰するために, 遺族の許可を得て複製した.
- 7) Matsuoka M. Atlas der angeborenen Verrenkung des Hüftgelenks in Röntgenbildern. Archiv und Atlas der normalen und pathologischen Anatomie der typischen Röntgenstrahlen. Ergänzungsband. 24. Hamburg: Lucas Gräfe & Sillem (Edmund Sillen); 1911
- 8) 文献5. p. 7
- 9) 文献5. p. 11-12
- 10) Adolf Lorenz (1854-1946) はシレジアのWeidenau(現・チェコ共和国のVidnava)に生まれ<sup>①</sup>, ウィーン大学の解剖学教室の臨時雇として働きながら26歳で同大学を卒業した<sup>②</sup>. Edward Albert教授のもとで外科学を専攻し, 1880年には助手, 1884年には講師に任命された. Albert教授はかれのために整形外科外来部を大学病院(Allgemeines Krankenhaus der Stadt Wien)内に創設し, 1920年に正式の整形外科教授に任命された<sup>③</sup>. しかし30歳の時, 石炭酸, その他の薬品に対するアレルギーが出現したので, 手術を放棄しwet surgeonからdry surgeonに転ぜざるを得なくなった<sup>④</sup>. ウィーンの医師たちはかれをGipsDozentと揶揄したと言われる.  
かれは筋骨格系の形態, 機能に対する機械的外力についてAlbert教授とともに研究して, 先天性, 後天性の筋骨格系の変形を猛撃矯正(bricement forcé)によって治療することは不適切であるとし, 手手的, 漸増的に矯正(redressment)し, その肢位をギブスなどによって固定することを提唱した. この原理から内反足(1884年), 側弯症(1885年), さらにカリエス(1887年)による脊椎変形の非観血的治療法を発表した. さらに19世紀末以来欧州で広く行われていた先天性股関節脱臼に対する観血的整復術に対して, 手手的に整復したのち股関節開排位でギブス固定すると言う新治療法を提唱した<sup>⑤</sup>. このLorenzの整復固定手技は, その後半世紀以上に亘ってわが国を含め

た全世界で広く行なわれた.

かれはのちドイツ整形外科学会の創設者のひとりとなったほか, 1902-1903年にアメリカを訪れて, アメリカ整形外科学界に多大の影響を与えた<sup>④, ⑤</sup>.

Katz<sup>①</sup>の論文にはLorenzを祖とするウィーン整形外科学派の系譜が載っているが, 松岡より前に東大田代義徳教授<sup>⑥, ⑦</sup>, あとに九大住田正雄教授<sup>⑧, ⑨, ⑩</sup>, とともに留学中にLorenzを訪ねて学んでいるところからも, Lorenzが本邦整形外科学へ与えた影響は大きい.

- ① Kotz R. The history of orthopaedics in Vienna on the 150th anniversary of Adolf Lorenz's birthday. European Surgery 2004; 36(6): 341-344 ②天児民和. Adolf Lorenz (1854-1946). 整形外科を育てた人達. 東京: 医学書院; 1999. p. 59-63 ③Lorenz A: Über die unblutige Behandlung der angeborenen Hüftverrenkung mittels der functionelle Belastungsmethode. Zentralbl Chir. 1896; 22: 761-764 ④Buckwalter JA. The Vienna heritage of Iowa orthopaedics. Iowa Orthop J. 2003; 23: 108-122 ⑤Jackson RW, Pollo F. The legacy of Professor Adolf Lorenz, the "bloodless surgeons of Vienna". Bayl Univ Med Cent Proc. 2004; 17(1): 3-9 ⑥田代義徳. 文献2. 注記と引用文献. (20) ⑦田代義徳教授(1864-1938). 文献10 ⑧. p. 347-450 ⑧文献1. 注記と引用文献. (49) ⑨「住田正雄」文献2. 「注記と引用文献」(38) ⑩住田正雄(1879-1946). 文献10 ②. p. 420-423
- 11) 松岡によれば, Lorenzの整復法とは, 手手的に下肢を伸展したのち股関節を屈曲, 内旋, 外転して大腿骨頭を髌臼(寛骨臼)の上縁, 後縁, あるいは下縁を越えてその中へ整復するものであって, それぞれ第一・第二・第三法と名付けている<sup>①</sup>.  
①文献5. p. 23-25
- 12) 松岡道治(著作兼発行者). 骨及び関節ノ結核. 東京: 丸善株式会社(発売); 1910/1/30
- 13) 松岡道治. 骨及び関節ノ結核. 中外医事新報 1906~1907(文献1. 表1. 39-2, 40-1)
- 14) 東京大学で経験したのは胸骨<sup>①</sup>, 肋骨<sup>②</sup>, 顱頂骨(頭頂骨)<sup>③</sup>の結核症例で, 胸骨の症例は助手のとき, 次の肋骨, 頭頂骨の2症例は第一(医)院<sup>④</sup>で, それぞれ経験したと述べている.  
①文献12. p. 16 ②文献12. p. 18 ③文献12. p. 18  
④神田和泉橋田藤堂邸に在った東京医学校は, 明治9(1876)年に本郷本富士町田加賀藩邸内(現・東京大学医学部附属病院の所在地)に新営, 移転した. 移転跡に, 医学大学撰科生<sup>⑤</sup>の臨床講義用の医院(患者収容所)が同11(1878)年に建てられて第二医院と名づけられ, 本郷の病院は第一医院とされた. 第一医院では主にドイツ人教師によってドイツ語で講義されていたが, 第二医院では日本語で教育が行われた. 明治34(1901)年第二医

院は火事で消失して廃止され<sup>①</sup>，跡地は明治42(1909)年に三井慈善病院(明治39年設立)が移転してきた。その後幾度かの名称変更があって，今日では三井記念病院と称せられている<sup>②</sup>。

【②帝国大学. 第四 撰科(第四章 分科大学通則). 帝国大学一覽. 東京：帝国大学；1886. p.22-24 ①東京大学総合研究博物館. 第1項 第二医院(旧東京医学校)(第1章 本郷キャンパス)([http://www.um.u-tokyo.ac.jp/DM\\_CD/DM\\_CONT/PARIS?BOOL/2/IMG024.HTM](http://www.um.u-tokyo.ac.jp/DM_CD/DM_CONT/PARIS?BOOL/2/IMG024.HTM) 平成20年7月20日現在) ③三井記念病院. 沿革([http://www.mitsuihosp.or.jp/contents2/tc\\_2.html](http://www.mitsuihosp.or.jp/contents2/tc_2.html) 平成20年7月2日現在)】

15) 文献12. p.29

ウルツブルヒ(Würzburg. ヴュルツブルグ)大学病理学教室在籍中，ウサギ膝関節に結核菌を注入し菌の動脈塞栓によって骨髄に病巣を形成することを証明する実験を行ったとしているが，この研究を報告した論文を筆者は脱稿までに見出していない。

16) 文献12. p.65

「ブレスラウ(Breslau. ブレスロウ)<sup>①</sup>医科大学ニ遊ブノ時，閑ヲ得テ，ヘルマン，ブレーメル氏ノ病院ヲ訪フ，時ノ院長ハ……高地転住療法ヲ肺結核ニ向テ称揚セリ」と記述している。

ここに言う「ヘルマン，ブレーメル氏」とは，植物学者で自らも肺結核患者であったシレジア出身のHermann Brehmer(1826~1889)<sup>②</sup>である。1854年，かれはBodingtonの著書<sup>③,④</sup>に触発されて高地(冷氣)大気療法のサナトリウムを世界で初めてゲルベルスドルフ(現ポーランド・ソコロウスコ. 標高540~590メートル)の杉林のなかに開設した。Campbell<sup>⑤</sup>によると，結核，精神病の高地大気療法(Freiluftkur[大気療法]，Freiluftliegekur[自由大気臥床療法]，jour médical[太陽医療])は，19世紀末から20世紀初頭の欧州における建築様式に大きな影響を与えたという。

①Breslau(ブレスロウ. 現・ポーランド・ヴロツワフ[Wroclaw])は，ポーランド西南部のシレジア地方の中心都市で，第二次大戦終結まではドイツ領であった。②Warren P. The evolution of the sanatorium: the first half-century. 1854-1904. Can Bull Med Hist 2006; 23: 459-476 ③Review of Mr. Bodington on consumption<sup>⑥</sup>. Lancet, 1839/40; vol. ii: 575-576 ④Keers RY. Two forgotten pioneers, James Carson and George Bodington. Thorax. 1980; 35: 483-489 ⑤Campbell M. What tuberculosis did for modernism: The influence of a curative environment on modernist design and architecture. Med Hist. 2005; 49: 463-488

【②Bodington G. Essay on the Treatment and Cure of Pulmonary Consumption. London, 1840】

17) 文献12. p.68-69

18) 文献12. p.69

なお明治43年の松岡の論文<sup>①</sup>では，先天性股関節脱臼整復後のギブス固定に際しては，「義布スニハイロイロアルガ，(中略)余リ良イノハ日本ニハアリマセヌ」とし，なるべく良いものを使うか，針金を入れたギブスを用いるように奨めている。

①松岡道治. 先天性股関節脱臼手術及綱帯法供覧. 児科雑誌 1909; 106: 153-161

19) 文献12. p.108

20) 松岡道治. 「オルトペデー」ノ一史. 内外医事新報 1906; 632: 1-3(文献2. 表1. 39-1)

21) 松岡道治. 「オルトペデー」トハ何ゾヤ. 中外医事新誌 1907-1909. (文献2. 表1. 40-2, 41-16, 42-5)

22) Heinrich Ernst Albers-Schönberg (1865-1921)<sup>①,②,③</sup>

はハンブルグに生まれ，チュービンゲン，ライプツヒで医学を学び，1888年に医師となった。始めライプツヒ，1895年からはハンブルグで産婦人科医として働いたが，エックス線に興味を抱いてGeorge Deycke<sup>④</sup>とともにエックス線の医学的応用のための研究所(Röntgeninstitut sowie Laboratorim sowie Laboratorium für medizinische hygienische Untersuchungen<sup>⑤</sup>)を1897年に私費を投じて設立し，また同年雑誌『Fortschritte auf dem Gebiete der Röntgenstrahlen』を創刊した。さらに1900年にはこの雑誌のErgänzungsband(別巻，補遺)として，『Archiv der normalen und pathologischen Anatomie in Röntgenstrahlen』(1901年発行の第5巻から書名を『Archiv und Atlas der normalen und pathologischen Anatomie in Röntgenstrahlen』に変更した)を創刊した。

生涯に150編の論文を発表し，いくつかの著書，とくにのちに5版まで版を重ねる『Röntgentechnik für Ärzte und Studierende』<sup>⑥</sup>を上梓した。これらの内容はエックス線による診断学，治療学だけでなく，その物理学，生物学，さらにその傷害，さらにその防御など多岐に亘り，また遮光板(Kompressionsblende)<sup>⑦</sup>など多くのレントゲン関連の機器を発明した。1902年にはAllgemeines Krankenhaus St. Georg, Hamburg(以下AKSGHと略す)に創設された世界初の放射線科の主任となった<sup>①</sup>。

1905年4月に開催された第1回ドイツ・レントゲン会議(Deutscher Röntgenkongreß)の会期中に，Albers-Schönbergらを創立者としてドイツ・レントゲン学会(Deutsche Röntgengesellschaft)が設立されたが，かれはこの学会の第2回大会の会長として斯界の発展に大きく貢献した。1919年にはハンブルグ大学で世界初のレントゲン科教授に任命された<sup>①</sup>。

婦人科医としてエックス線の性腺への障害作用を早くから明らかにしていたが，1908年に自身の右中指に放射線癌を発症し，2年後には上腕中央の切断術を受けたが，その後癌は全身に転移して1921年に死去した<sup>①,②,③</sup>。

かれは1903年に骨斑紋症<sup>⑦</sup>を、1915年には大理石骨病(Albers-Schönberg病<sup>⑧</sup>)を、それぞれ初めて報告している。

なおAKSCHのAbteilung der Röntgendiagnostikは“Albers-Schönber-Institut für Strahlendiagnostik”と現在名付けられている<sup>⑨</sup>。

①Grashey R. Heinrich Ernst Albers-Schönberg<sup>†</sup>. Fortschr Geb Röntgenstr. 1921; 28: 197-205 ②Gauwerky F. Heinrich Albers-Schönberg und die heutige Generation der medizinischen Radiologie und Nuklearmedizin. Radiologie. 1965; 5: 252-255 ③Vogel H. Das Ehrenmal der Radiologie in Hamburg. Ein Beitrag zur Geschichte der Röntgenstrahlen. Fortschritte auf dem Gebiet der Röntgenstrahlen und der bildgebenden Verfahren. 2006; 178: 753-756 ④Franz Burghardt Georg Deycke (1865-1938)は、ストラスブール大学で医学を修め、はじめHamburg-Eppendorf大学病院(Universitätsklinik)の内科医となったが、1898年にコンスタンチノーブルの王立オスマン病院の科学研究所へ移り、1903年から1907年までその所長を務めた。その後ハンブルグへ帰り、英領ガイアナ(現・ガイアナ共和国〔南米〕)のハンセン病収容施設などを経て、Hamburg-Eppendorfの上級医となった。1913年からリュウベック(Lübeck)のAllgemeines Krankenhausへ移り、1921年~1928年院長を務めた<sup>⑩</sup>。結核治療の専門家として知られたが、1929-1930年のいわゆるリュウベック事件<sup>⑪</sup>の責任者として有罪を宣告され、1939年にシュツツガルトで自殺した。⑤Albers-Schönberg HE. Die Röntgentechnik. Handbuch für Ärzte und Studierende. Hamburg: Lucas Gräfe & Sillem; 1903 ⑥Albers-Schönberg氏圧迫遮光板(Kompressionsblende)<sup>⑫</sup>とは、内面に鉛板を張った筒状の円筒で、エックス線管球に取り付けてエックス線の散乱を防ぐとともに、鮮明な画像を得るために体表を圧迫して撮影対象との距離を短縮させる装置で、Albers-Schönbergが考案し<sup>⑬</sup>、当時広く用いられた<sup>⑭</sup>。⑦Albers-Schönberg, H. E. Ärztliche Verein, Hamburg 9. II, 1904. Fortschr Geb Röntgenstr. 1903/04; 158-15 ⑧Albers-Schönberg, H. E. Eine seltene, bisher nicht bekannte Struktur-anomalie. Fortschr Geb Röntgenstr. 1915; 23: 174-175 ⑨Vogel H. Strahlen heute (<http://www.xraytoday.de/institut.htm> 平成20年6月21日現在)

【⑩Georg Deycke ([http://wapedia.mob/de/Georg\\_Deycke](http://wapedia.mob/de/Georg_Deycke) 平成20年6月28日現在) ⑪Georg Deycke ([http://www.bionitu.com/lexikpm/d/Georg\\_Deycke](http://www.bionitu.com/lexikpm/d/Georg_Deycke) 同前) ⑫戸井田一郎(BCGの歴史:過去の研究から何を学ぶべきか。呼吸器疾患・結核 資料と展望. 2003; 48: 15-40)によれば、リュウベック市総合病院の研究室でCalmetteの方式に従って製

造されたBCGを経口投与された251人の乳児から1929年12月から1930年4月にかけて次々に結核が発症し、そのうち72人が死亡した事件である。毒性のある生菌が誤って投与されたことが原因であるとされている(Murray JF. A century of tuberculosis. Am J Respir Crit Care Med. 2004; 169(11): 1181-1186) ⑬館野之男. 散乱線の除去(第3部 X線診断学の発達 第14章 写真法の発展). 放射線医学史. 1933; 東京: 岩波書店; 1933. p. 115-118 ⑭加藤芳郎, 青柳泰司, 林周二, 遠藤俊夫. 遮光円筒(Cylinder diagram). (第2章 X線装置・X線管および附属品) 日本放射線技術学会技術史編纂委員会編. 日本放射線技術史. 京都: 日本放射線技術学会; 1998. p. 130-131 ⑮Albers-Schönberg. Eine Kompressionsblende zum Nachweis von Nierensteins. Fortschr Geb Röntgenstr. 1901/02, 5: 301-308 ⑯Albers-Schönberg. Technische Neuerungen. Fortschr Geb Röntgenstr. 1903/04; 7: 137-141 ⑰Grashey R. Technisches zur Albers-Schönbergschen Kompressionsblende. Fortschr Geb Röntgenstr. 1904/05; 8: 356-359】

23) 本書のエックス線写真について、序文にはすべて Rückenlage(仰臥位)で撮影したと書いてあるにも拘らず、写真自体には左股関節が向かって左側に写っていることを、平成17年秋渡辺良・川崎医科大学名誉教授から指摘された。改めて調べてみると、本書だけでなく上記松岡の著書<sup>⑱</sup>に掲載されているエックス線写真でも、すべて今日通常印刷されているエックス線フィルム像とは左右逆になっている。

その理由については明確ではないが、筆者はそのひとつの理由と考える記述を小林増作の論文<sup>⑲</sup>に見出すことができた。この論文では、「小官ハX光線撮影ノ際常ニ乾板上ニ「プロマイド」紙ヲ置キ先ス「プロマイド」紙ヲ現像シテ軍医官ニ示スヲ例トセリ」と記している。エックス線操作はその発見当時から急速に発展し、すでにこの論文が発表された明治38(1905)年頃には、ガラス乾板(種板)の像を直接見るのではなく、その像をプロマイド紙(bromide paper)へ焼き付けることが普通となっていたと推定でき、論文ではその焼き付け画像を印刷していたものと考えることができる。そうであれば、この焼き付け画像は被写患者の右側はそのまま焼き付け紙の右側に焼き付けられ、さらに黑白が今日と逆、すなわち骨が黒く、背景が白く写ることになる。

⑲小林増作. X光線撮影法ニ就キテ. 海軍医事報告撮要 1905; 47: 24-29

24) Trapp. Bücherbesprechungen. Fortschr Geb Röntgenstr. 1911; 17: 329

25) Joachimethal. Referate. Z orthop Chir. 1911; 28: 555-556.

26) Max Schede (1844-1902) は AKSCH からボン大学教授となった外科医である。次述の著書<sup>27)</sup>によって先天性股関節脱臼のエックス線学的病理解剖が初めて明白になったとされている<sup>①</sup>。

① Peltier LF. Orthopaedics. A History and Iconography. San Francisco: Norman Publishing; 1993. p. 68

27) Schede M. Die angerene Luxation des Hüftgelenks. Atlas der normalen und pathologischen Anatomie in typischen Röntgenbildern<sup>①</sup>, Ergangsbund 3, Hamburg: Lucas Gräfe & Sillem (Edmund Sillen); 1900

①『Archiv und Atlas der normalen und pathologischen Anatomie der typischen Röntgenstrahlen』の第4集までの書名である<sup>22)</sup>。

28) 廣谷速人. 京大初代松岡教授のほん. 整形外科 1989; 40: 276

29) 蒲原宏, 小林晶, 坂口亮, 山室隆夫, 玉置哲也. 日本の整形外科の歴史について (前篇). 日本整形外科学会雑誌 2002; 77: 379-390

30) 筆者が確認した (平成 15 年 11 月 10 日) が, 筆者が指摘するまでは NACSIS Webcat では岡山大学鹿田分館所蔵となっていた. 昭和 55 (1980) 年の香川医科大学 (現・香川大学医学部) 創設に際してその図書館へ移管されたが, 訂正されていなかったためである。

31) 京都大学医学部整形外科学教室百周年記念事業実行委員会. Memories of Founders of the Department. 京都大学医学部整形外科学教室百周年記念誌. 京都: 京都大学医学部整形外科学教室百周年記念事業実行委員会; 2006. p. 4-31

32) 松岡は明治 40 (1907) 年夏の叡山講演会「人体を透視する方法」<sup>①</sup>のなかで, 「私は昨年独逸から帰って, 京都の大学で研究を致しましたが, 自分は多少あちらの人よりも能く写すという見込が附いた」と言い, エックス線発生管球装置 (松岡はランプと呼んでいた) については「私は多年独逸に居つて使つて見たり, 或は帰って来て使つて見た経験」から大きいほうがよくと述べているところから, 自らのエックス線撮影技術に自負があったものと判断できる。

なお実用的なエックス線装置は, 明治 30 (1897) 年に (東京) 帝国大学, 名古屋・好生館<sup>②</sup>, 明治 31 (1898) 年に陸軍 (軍医学校, 第四師団, 台湾軍)<sup>③</sup>と, 初期はドイツから輸入されていて, 国産一号機が京都の島津製作所によって初めて作製され国府台衛戍病院へ納入されたのは, 明治 41 (1908) 年のことであった<sup>④</sup>。しかし, その開発, 製作に松岡ないし京都帝国大学 (とくに医科大学, 理工科大学) の教員が公的, 私的に, あるいは直接, 間接に関わった記録はない。

①松岡道治. 人体を透視する方法. 小池信美編. 叡山講演集. 大阪: 大阪朝日新聞社; 1907. p. 1-15

②後藤五郎. 明治 29 年~明治 42 年. 日本放射線医

学史考. 東京: 日本医学放射線学会; 1969. p. 5-71  
③陸軍軍医学校編. 明治 31 年 (第四編 陸軍軍医学校時代). 陸軍軍医学校五十年史. 東京: 陸軍軍医学校; 1936. p. 44-45  
④ 2.1. 明治大正期. (第 2 章 X 線装置・X 線管および附属品) 文献 22 ⑤. p. 55-78

33) Verzeichnis der Verfasser der Eigenarbeiten. Verfasser- und Sach-verzeichnis an Band 1-50 (1897/98-1934). Fortschr Geb.Röntgenstr. 1935. p. 26-28

34) 松岡道治. エッキス放射線器械ノ装置及其使用法. 日新医学 補修講演. 1912; 1(10): 157-175 (文献 2. 表 1. 45-7)

35) Verzeihnis der Teilnehmer, Mitglieder, M. Verh Dtsch Röntgen-Ges. 1905; 1: 9

36) 医事新報社編集兼発行. 済生学舎講師講義 外科臨床講義録 卷中 外科篇. 1900.

37) 済生学舎<sup>①</sup>は, 長谷川泰<sup>②</sup>が明治 9 (1876) 年 4 月に創設した私立医学校であって, 医術開業試験のための西洋医学を教えたが, 明治 36 (1902) 年 8 月に突然廃校された. その間の入学者は 2 万人を超え, その卒業生で医術開業試験に合格した者は 1 万人弱で, 総合格者数の半数を占めた. わが国の医学校で始めて女性に門戸を開いたことや明治 26 年以来廃校まで毎月『済生学舎医事新報』誌を発行したことは特記に値する<sup>③</sup>。なお松岡は明治 33 年 4 月から京都医科大学赴任の明治 34 年 3 月まで, 済生学舎の講師を務めた<sup>④</sup>。

①神谷昭典. 第三節 済生学舎 (第三章 私立医学校の成立). 日本近代医学の定立: 私立医学校済生学舎の興廢. 東京: 医療図書出版社; 1984. p. 76-116  
②長谷川泰は, 新潟の代々の医家の出身で, 天保 13 [1842] 年越後國古志郡福井村 (現・新潟県長岡市福井町) に生まれ, 江戸の薩藩英学塾, 幕府の西洋医学所に学び, 戊辰戦争には長岡藩医として従軍した. 明治 2 (1869) 年上京して大学少助教になり, 翌年大学中助教に進み, さらに明治 4 年大学助教に昇任して, ドイツ医学の移入に努力した. 明治 7 (1874) 年 8 月に長崎医学校 (現・長崎大学医学部) の校長に任命されたが, 同年 10 月に同校は廃止された. 明治 8 (1875) 年済生学舎を創立し, 医術開業試験合格者総数の半数に及ぶ合格者を輩出したが, 明治 36 (1903) 年夏に突然廃校にした. 明治 9-14 年に東京府病院長を務め, その後文部省, 警視庁の要職に就いた. 明治 23 (1890) 年の第 1 回衆議院選挙に当選し, 明治 31 (1898) 年内務省局長となった. 明治 45 (1912) 年死去. 享年 70 歳<sup>⑤</sup>。  
③内外雑報 (一) 舎報 夏学期開講. 済生学舎医事新報. 1900; 88: 375

【④唐沢信安. 長谷川泰と済生学舎関係記事. 済生学舎と長谷川泰——野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学校——. 東京: 日本医事新報社; 1996. p. 182-189】

38) 文献2. 表1. 33-10, 11, 12, 13; 34-3, 4, 5, 6, 7

39) 山谷徳治郎編. 最新結核病論. 東京: 日新医学社; 1915

本書には、北島多一(北里研究所部長)の「結核ト人牛結核菌型ノ関係ニ就テ」をはじめとして、肺結核の基礎、臨床、治療法(ツベルクリン療法、化学療法、人工気胸療法)、さらには頸腺結核、結核性腹膜炎、眼結核、皮膚科・泌尿器科領域など、広範な領域における当時の結核専門家による総説(原著と講演)が27編集録されている。整形外科領域では、この松岡の論文に続いて東京帝国大学田代義徳教授<sup>①</sup>、九州帝国大学住田正雄教授<sup>②</sup>の論文が収録されている。なお国会図書館NDL-OPACのデータには、著者としての松岡道治は松岡直治と誤記されている。

①田代義徳. 結核性股関節炎治療法. 文献39. p. 531-548 (なお本論文の末尾には「日新医学社講演会(大正元年11月17日)の講談、『臨牀醫學』第1年, 第2号」と注記されていて、同誌の241-258頁(大正2年)の論文の標題は「結核性股関節炎ノ治療法」となっている) ②住田正雄. 骨及関節ノ結核. 文献39. p. 549-556

40) 松岡道治. 輒近ニ於ケル結核性股関節炎治療法ノ改善. 日新医学. 1911; 1(1): 107-126

41) 松岡道治. 温熱療法. 中川恭二郎編. 栄養療法, 看護療法, 水治療法, 温熱療法. 青山胤通撰, 林春雄, 富士川游, 尼子四郎, 宮本淑編. 日本内科全書. 東京: 吐鳳堂 1913; 2(1): 197-227

42) 小池信美編. 叡山講演集. 大阪: 大阪朝日新聞社; 1997

本講演会は、序文にあるように「東西二都の学者及び陸海軍の兵学家禮聘し、四方の俊髦を靡きて」開催されたものであって、新渡戸稲造(第一高等学校校長)、井上哲次郎(東京文科大学教授)、白鳥庫吉(東京文科大学教授)、内藤虎次郎(京都文科大学講師)らのほか、京都医科大学からは松岡のほか荒木寅三郎(医化学)、足立文太郎(解剖学)、和辻春次(耳鼻咽喉科学)の諸教授が参加している。参加者は延638人、本講演集の申込者は1万2千と記されている。

松岡はこの講演会上記「人体を透視する方法」<sup>32)</sup>のほか、下記の三講演<sup>①, ②, ③</sup>を行なっている。

①如何なる病気が最も惨酷なるや. p. 16-23 ②生と死. p. 24-31 ③吾人は天然の賜物を如何に応用すべきや. p. 32-47

43) 癌については、この講演の前後に松岡は学会演題<sup>①, ②</sup>や論文<sup>③, ④</sup>を公にしている。ちなみに明治40(1907)年8月には癌研究会<sup>⑤</sup>が発足して国際癌学会へ加盟し、雑誌『癌』<sup>⑥</sup>が創刊されている<sup>⑦</sup>。その意味からこの講演は時宜を得たものであり、松岡の学問的興味がいかに広汎であったかを示すものである。

①松岡道治. 胃癌ノ發育(Wachstum)及ビ蔓延

(Verbreitung). (芸備医学会京都部会総会, 京都市, 明治40年2月)芸備医学 1907/2; 129: 25-29 ②松岡道治. 胃癌ノ病理解剖ニ就テ. 日本外科学会雑誌 1907/4; 8(1): 59-60 (文献2. 表1. 40-10) ③松岡道治. 胃癌療法ニ対シ臨床医家ノ注意ヲ促ス (Zur Beachtung des Kliniker für d. Behandlung des Magencarcinoma). 癌 1907/08; 1(1): 238-253 ④松岡道治. 癌腫に就テ. 医海時報 1908/1/1; 707: 16-17. および1908/1/11; 708: 106-108 (文献2. 表1. 40-5) ⑤癌研究会七十五年史編纂委員会編. 1. 概要 および 2. 創業時代の癌研究会(第一章 草創期). 癌研究会七十五年史. 東京: 癌研究会; 1989. p. 11-12 および p. 12-19 ⑥昭和34(1959)年, 第50号から誌名を現在の“Gann. Japanese Journal Cancer Research”へ変更した。

44) 「健康地分布図」は、全国道府県をさまざまな要因から最健康地から第二・第三・第四・第五健康地に5区分して、「最健康地」(最モ健康ニ適スル地)として茨城、宮崎、鹿児島各県、最下位の“第五健康地”(ニ〔第四〕ニ次テ健康ニ適スル地)として東京府(現・東京都)、富山県、大阪府、淡路島を挙げているが、個々の地域についての具体的な理由説明はない。

45) 宮崎三郎(宮寄浜南)編. 現代思潮 二十一家講話. 東京: 博文館; 1908.

本書の“二十一家”の中には、井上密(京都帝国大学法科大学学長)、内藤虎次郎(湖南, 京都帝国大学文科大学教授)らの京都帝国大学教授だけでなく、建仁寺派管長(竹田黙雷)、神宮皇學館長(桑原芳樹)のほか、京都市立染織学校(現・京都市立洛陽高等学校の前身)校長、京都蚕業講習所(現・京都工芸繊維大学繊維学部)所長、大阪府立医学校校長兼病院院長(現・大阪大学医学部)佐多愛彦<sup>①</sup>、大阪高等商業学校(現・大阪市立大学商学部, 経済学部, 法学部の母体)、大阪高等工業学校(現・大阪大学工学部の前身)の教授、教諭ら、当時の関西の指導的知識人を揃えている。

①佐多愛彦<sup>②, ③</sup>は、明治4(1871)年9月に鹿児島市鍛冶屋町で生まれ、明治20(1887)年に鹿児島医学専門学校を卒業したのち、帝国大学医科大学選科に入学、外科学、病理学を学んだ。明治26(1893)年医術開業試験に合格したのち、市立富山病院へ赴任したが、明治27(1894)年に府立大阪医学校の教諭(病理学)に迎えられ、明治30-33年ドイツへ留学、明治33(1900)年に医学博士の称号を受け、明治35(1902)年に校長兼病院長になった。佐多の努力によって、府立大阪医学校は大正4(1915)年に府立医科大学、大正8(1919)年に(公立)大阪医科大学と昇格し、佐多はこれらの初代学長を務めた。大正13(1924)年に学長を辞し、結核専門の診療を大阪の自宅で行いつつ、医学会

内外の要職を歴任した。昭和25（1950）年3月に死去した。

【⑧高梨光司. 佐多愛彦先生年譜. 佐多愛彦先生傳. 大阪：佐多愛彦先生古稀壽祝賀記念事業会；1940. p.1-11 ⑨安井昌孝. 佐多愛彦をめぐって. 日本医事新報. 2003；4112: 57-61（本エッセイで著者は、佐多の名、愛彦に“よしひこ”と仮名を振っているが、少なくとも『佐多愛彦先生論文集』〔大阪：佐多愛彦先生古稀壽祝賀記念事業會編，出版. 1940〕に収録されているドイ

ツ語論文では，“A. Sata”あるいは“Aihiko Sata”となっている）】

46)「大阪新報」は明治10（1877）年12月に創刊され、明治後期の大阪では「大阪朝日」「大阪毎日」に次ぐ位置を占めていたが、大正15（1926）年1月に無期休刊した<sup>①</sup>。

①小野秀雄. 地方別 日本新聞史 大阪府新聞史（序論，後論）. 日本新聞協会編. 東京：日本新聞協会；1956. p.289-299, 301-310

## Prof. Dr. Michiharu Matsuoka, Founder of the Department of Orthopaedic Surgery, Kyoto University, and His Achievements (Part 3: Books Written by Prof. Dr. M. Matsuoka)

Hayato HIROTANI

Kyoto city

In addition to articles written by Prof. Dr. M. Matsuoka previously reported in Part 2, books written by him are presented as Part 3 of the articles regarding his academic achievements. He published four text books, including the first textbook of orthopaedic surgery in Japan that was written by a Japanese doctor and a monograph on the x-ray atlas of congenital dislocation of the hip that was written in German and published in Germany. He was also invited to submit articles to three books as co-author. Furthermore, his five educational lectures given to the public were published in two books.

**Key words:** M. Matsuoka, orthopaedic surgery, Kyoto University